



臨終図巻
 ドクター和のニッポン

長尾和宏(ながお・かずひろ)
 医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビンク・ウイルの啓発を行う。映画『痛くない死に方』『けったいな町医者』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも。

380

ファッション評論家 ピーコ

静かな衝撃を受けた人生そのものを表現した助言

IKKOさんやマツコ・デラックスさんなど、昨今はいわゆるオネエキャラと呼ばれるタレントさんがたくさん活躍されています。

その先駆けとなったのは間違いなく、ファッション評論家と映画評論家の双子のおかまとして名を馳せ(は)せた「おすぎとピーコ」さんでしょう。知的で、お洒落(しゃれ)で、毒舌で…。そのピーコさんが9月3日に神奈川県内の病院で亡くなっていました。享年79。死因は、敗血症による多臓器不全との発表です。

おすぎとピーコさんは、数年前に2人とも認知症と診断され、2021年末より休業状態に。その後、一緒に暮らして老々介護をしていた時期もあったようですが、昨年より別々の介護施設に入所をされています。



この原稿を書くにあたり、いろいろな追悼記事を読ませていただきましたが、ミッツ・マングローブさんがAERA. dot に書かれたコラム「ピーコさんとの記憶「人として、男として、オカマとして」」がとても素敵(すてき)でしたので、一部紹介させていただきます。

〈何かの番組でピーコさんと対談した時に、「今こうしてたくさんテ

レビに出始めて、とんでもなく忙しいでしょ? でもね、消費される側に回るとね、たとえどんなに暮らしが豊かになってもね、5年もすれば枯渇するのよ。それは覚悟しておきなさい。あなたが30年以上かけてインプットしてきた経験や知識も、一度すべて空っぽになるから。私もそうだった。全部の引き出しがすっからかんになった。だけど忙しいとインプットが追いつかない。それから勝負なのよ」と言われたことを、今でも折に触れて思い出します〉

ピーコさんがミッツさんに助言したというこの言葉に静かな衝撃を受けました。芸能界に限らず、人生そのものを表現しているように感じたのは僕だけでしょうか。

どんなに積み上げてきた経験も知識も豊穣(ほうじょう)な人間関係

も、年をとって振り返れば、ただ春の夜の夢の如し。人生にも四季があるのです。鮮やかに眩(まぶ)しい夏を過ごした後、生い茂っていた葉は落ちて、枯れていく。それが「老い」ということなのでしょう。だけど、死はすぐに訪れてはくれません。

人生の終盤の秋と冬をどう過ごすか? 色鮮やかな季節を思い出しているだけではもったいない。しかし、秋から冬に人は必ずや、何かしらの病を得ます。がんであったり、認知症であったり、糖尿病であったり…それも含めて人生なのだわかっていない幼稚な人が、おすぎとピーコさんのことを「双子で認知症になって可哀想」だとか、「おかまの老々介護」なんてSNSで揶揄(やゆ)をする。

「放っておいて頂戴、あんたもいずれそうなの!」というピーコさんの声が聞こえてきそうです。